



ジャズ理論と金融数理モデル

ジャズという音楽が、以前に比べて大衆化したような気がする。街中でもジャズを耳にする機会が増え、最近では中華料理店のバックグラウンドミュージックとしてジャズが流れていても不思議はない。

ジャズはわかりにくいとよくいわれるが、ジャズのバンド演奏の基本的な枠組みは比較的単純であり、だいたい次のようになっている。すなわち、イントロに続いてテーマが一通り演奏された後、テーマと同じコード進行が繰り返し演奏され、そのコード進行に沿って各楽器演奏者のアドリブ（即興演奏）が繰り広げられる。そして、最後に再びテーマが演奏され、エンディングを経て曲が終了する。

ジャズの発祥は100年ほど前のニューオーリンズに遡るといわれるが、その時代から今日に至るまでの間に、ジャズの演奏スタイルは種々の音楽と融合しながら実に様々な変遷を遂げ、多様化してきた。

一方、ジャズの演奏スタイルが確立し、発展・多様化すると、それを理論的に解明しようとする「ジャズ理論」というものが生まれてきた。ジャズ理論とは、コード進行やアドリブ奏法を解析して一種のモデルとして体系化したものであり、ジャズの初学者にとっては納得性が高く、大変参考になるものである。ジャズ理論ではすべてをモデルで説明し

ようとするが、ジャズのアドリブは本来演奏者の感性・感覚によって創造されるものであるから、不思議とモデルでは説明できない部分が存在する。

ジャズのスタイルの変遷を歴史的に見ると、大きな構造変化が起きた時期が何度かある。1960年代、コード進行を細かく分解していきそのコードに沿ったフレーズでアドリブを演奏するバップと呼ばれるスタイルがコードの制約のために行き詰まり、コード進行の枠組みから離れて旋律をより意識し

たアドリブを演奏するモードと呼ばれるスタイルが生まれたのがその一例である。こうした構造変化も、聴く人にとっては単に緊張感のある斬新な演奏として自然に受け入れられたわけであるが、ジャズ理論の世界では常にモデルの説明力が意識されており、既存のモデルの限界を感じ取った人が様々な分析と試行錯誤を行って、新たな理論体系を作りあげてきた。

金融の世界でも、現実に行き起きている事象を理論的に説明するために様々な数理モデルが考案され、広く実務に応用されている。しかし、数理モデルは過去のデータなど限られた情報をもとに構築されるものであるから、その説明力には自ずと限界がある。このように、ジャズ理論と金融数理モデルは、よりよく説明すべく常に改善が必要であるという点で共通しているといえよう。（井上 和久）

